

遠藤さくら、斎藤柊奈、オルティス ゆみこ、高橋はるか、桑田梢、坂本有悠美、佐藤乃巴桂、荒井絵理菜、丹治真奈、村里杏子、堀部聖人、コハツ ホセ、金子彩香、竹元志穂、桑原奈見、王舫璐、安秋爽、鄭思宇、金森夏実、菅原愛実、千葉有世、千葉夏美、富田珠友、松浦樹里、池田瑞希、山根健志、渡邊晴奈、塩沼サナエ、城田三好、叶金栄（以上、宇都宮大学 HANDS プロジェクト Jr を含む 30 名の学生）
伊藤康子、小池美佐子（以上、前期内地留学生）
HANDS プロジェクト教職員（代表：田巻松雄）
芳賀陽子（国際学部附属多文化公共圏センター事務補佐員）

「拠点校」は40校、「日本語の先生」は56人 （第1回外国人児童生徒支援会議報告）



国際学部特任准教授

若林 秀 樹

HANDS プロジェクト第1回外国人児童生徒支援会議が、7月23日UUプラザにて開催されました。この会議は栃木県教育委員会から「外国人児童生徒教育拠点校」（以下、拠点校）に指定されている、小中学校40校の日本語教室（教室名称は学校任意）担当教員をメンバーとしています。ここでは、開催に先立ち実施したアンケート回答の中から、各校の担当教員数やかれらの経験年数、そして担当教員が抱える悩みなどを紹介することによって、栃木県内の小中学校における「外国につながる教育」体制を把握したいと思います。

40校の内訳は小学校30中学校10となり、県内で外国人が多く居住する主な地域に開設されています。しかし、足利市・栃木市・那須塩原市・鹿沼市・壬生町の4市1町については、小学校に拠点校がありながら中学校に拠点校が無いという実態もあります。また拠点校とは別に、宇都宮市と小山市には、「初期指導教室」が開設され、学校生活に必要な日本語や基礎的な教科学習を指導しています。「初期指導教室」は栃木市にも開設されていますが、前述2市のような独立教室ではなく、栃木中央小学校の日本語教室と連携する形で運営されています。

全拠点校における日本語教室担当教員数の合計は56名で、担当が2名以上いると回答したのは40校中10校でした。拠点校に指定されると教員の加配措置を受けることができ、学校の実情によっては複数名が加配される場合もあるようです。しかし、56名中何名が加配教員か、また教諭と講師の

別などは把握することはできませんでした。

担当教員の外国人児童生徒教育に関する経験年数を見てみると、今年1年目が10名、2年目と3年目が共に11名となり、全体の57%を占める32名が“経験3年未満”という結果になりました。その他は、4年目12名、5年目3名、6~9年目計6名、10年以上4名という結果でした。日本語指導や適応指導などの専門知識や、学級担任や保護者との連携手段など身につけるべきことの多さを考えると、経験年数が少ない担当者の占める割合に課題を感じます。

またアンケートには、支援会議で話題にして欲しい事がらや、日頃気になっていることも書いていただきました。「学級担任や教科担任の要望を優先させると日本語教室本来の指導ができない」、「小学校同士は連携がとれるが中学校に拠点校が無いので支援が途切れてしまう」、「日本語指導は楽だと思われ校内での発言力が弱くなり頼まれごとが多くなる」など、担当教員にならなければ分からない悩みが多く寄せられました。一方、「今年初めて担当になったので他の学校の様子を積極的に知りたい」、「最近増加しているフィリピンの子どものために資料を充実させたい」「外国人保護者も世代交代によって教育に対する意識が変わってきたので啓発活動を行いたい」など、自ら課題を見つけ取り組む意欲的な姿勢も多く見られました。

会議の前半は、自己紹介を兼ね各教室の実態や担当教員が感じている事など発表していただくことにより、県内の外国につながる子どもの教育に関す

る課題を共有することができました。後半は、平成26年度から実施すると文部科学省から発表され話題になっている「公立小中学校における日本語指導の特別の教育課程への位置づけ」について、現存する情報を共有するための勉強会を行いました。この話題については、10月に開催される県教委主

催の担当教員向け研修会で詳細が伝達されることになっています。11月開催予定の第2回支援会議では、県の研修会伝達事項を踏まえた具体的な協議を行うとともに、改めてこの欄で報告したいと思います。

進め 日本語教室

第5回

よろしくお祈いします。

真岡市立真岡西小学校教諭

塩野谷佳之

今年度から真岡西小学校の日本語教室担当になりました。外国人児童に日本語指導や教科補充などをしており、充実した毎日を過ごしております。

真岡市は、西側に工業団地があり、様々な製品を作りたくさんの方々働いています。私が勤務している真岡西小学校は、真岡市の中心部に位置しています。北側には県道が走り、学区内にはたくさん住宅地があることなどから、1100名をこえる児童が通う、県内で最も児童数の多い小学校です。そのうち、1割に近い約80名の児童が外国籍の児童です。学校の周囲には工業団地で働いている外国人が多く居住していることが、本校に外国人児童が多い一因になっていると思います。

私自身が真岡市の出身なのですが、小学生のころは外国人の児童はいませんでした。外国の方を見ると珍しいものだと思っていました。ところが、小学校を卒業し20年ほどして、本校に赴任したときに、クラスに4人外国籍の児童がいました。当時私の学級の児童数は40人だったので、1割が外国人児童ということになりました。学級の児童たちは日本人外国人関係なく同じ友達として遊んでいて、たいへん感心しました。私自身が、自分の中に垣根を作っていたようで、恥ずかしくなりました。今でも覚えています。また本校への赴任により日本語指導教室の存在を初めて知り、外国人児童にとってなくてはならない場所であることを知りました。

私は、平成21年度に宇都宮大学でポルトガル語の内地留学をさせていただきました。それまでは学級担任として、児童を日本語指導教室に通わせて

いました。学級に戻ってくる児童が充実した様子で帰ってくるのを見て、ありがたいと思っていました。半年間の内地留学の中で、日本にやってくる外国人の社会的背景や外国人児童生徒を取り巻く教育面での問題、県内各小中学校での様々な取り組みについて学習することができました。また、ポルトガル語を学習することで、新しい言語を習得する困難さを実感し、外国人児童が日本語を習得するために、大変な苦勞をしなければならないこともわかりました。内地留学から学校現場に戻ると、外国人児童が毎日の生活において苦勞し努力しているんだということを、改めて実感できたように思えます。それから昨年までの3年間、私は学級担任として勤務してきました。外国人児童にやさしい日本語で接したり、個別指導をしたりと内地留学で勉強してきたことを活かしながら、学級担任として指導にあたりました。

これまでの1学期間、日本語教室担当教員という立場で仕事をし、日本語指導教室でやっていることは、日本語指導や教科補充など学習面だけではないことがわかりました。保護者に学校のことを詳しく伝えたりする保護者対応のこと、外国人児童への生活指導のこと、学級担任との連携を図ること等、たくさんの仕事に気づきました。その仕事を責任持って遂行するためには、広い視野を持ち意欲的に取り組むことが大切だとわかりました。これからも仲間である日本語教室の先生方や、巡回していただいている指導助手の先生、学級担任を含む本校の全教職員と連携して、日本語教室の仕事にあたりたいと思います。これからもよろしくお祈いします。